

令和6年度 富山市ガラス美術館協議会 協議要旨

日 時：令和6年7月25日（木）13：30～15：00

場 所：ガラス美術館6階レクチャールーム

出席者：協議会委員（敬称略）6名

秋元雄史（会長）、嘉義政彦、唐澤昌宏、竹脇孝志、

外館和子（副会長）、浪瀬佳子

ガラス美術館 11名

伊東名誉館長、土田館長、北村副館長、開澤次長、土方館長代理、藤井係長、

渡部主任学芸員、中島主任学芸員、浅田主任学芸員、高橋主任学芸員、宝田主事

欠席者：協議会委員（敬称略）2名

石崎由則、石田敬真

資料1 富山市ガラス美術館協議会概要等

1-1 富山市ガラス美術館協議会の概要について

1-2 富山市「ガラスの街づくり」の主な取組みについて

1-3 富山市ガラス美術館企画展について

1-4 富山市ガラス美術館基本方針

資料2 令和5年度富山市ガラス美術館事業実績等……………議事（2）

2-1 令和5年度富山市ガラス美術館の当初予算額及び決算額について

2-2 令和5年度富山市ガラス美術館の主要事業について

2-3 令和5年度TOYAMAキラリ入館者数及び富山市ガラス美術館
観覧者数について

2-4 令和5年度富山市ガラス美術館5階ギャラリー使用実績について

2-5 令和5年度公益施設内関連イベント実施状況について

2-6 来館者アンケート集計結果

資料3 令和6年度富山市ガラス美術館事業計画等……………議事（3）

3-1 令和6年度富山市ガラス美術館事業一覧について

3-2 令和6年度富山市ガラス美術館展覧会開催スケジュールについて

参考資料

1 ミュージアムショップ（2階）のオリジナル商品について

2 カフェ（2階）メニューについて

（協議要旨）

1. 開会（司会進行：藤井係長）

2. 名誉館長挨拶

3. 館長挨拶

4. 出席者紹介

5. 議事（司会進行：秋元会長）

- (1) 会長、副会長の選任について（秋元委員を会長、外館委員を副会長として選任）
- (2) 令和5年度富山市ガラス美術館事業報告について（開澤次長から説明）
- (3) 令和6年度富山市ガラス美術館事業計画について（開澤次長から説明）

6. 意見及び質疑応答

(浪瀬委員) ストリート・ミュージアムのショーケースについて、屋外にあることで美術館に行かなくても作品に触れられることがとても良いと感じていたが、撤去されているのはどういった理由からか。また市外から来る人たちへのアピールはどのように考えているか。

(土田館長) ストリート・ミュージアムについては、ガラス美術館ができる以前、完成を盛り上げるために設置されたものである。現在はケースの老朽化が激しいことや、ケース内作品の保存環境の悪さから数年前より撤去を進めている。設置された役割をある程度終えたと考え、今年度中にほぼ全ての撤去が完了する予定。

今後は作品に対して良い環境で展示できるよう、屋外ではなく屋内での展示を検討しているところである。

(浪瀬委員) 以前ケースのメンテナンスをしているのを見たことがあるが、近くの電停を掃除している人に比べてケースの清掃はやけに早く終わったなという印象があった。

(伊東名誉館長) ストリート・ミュージアムは中心市街地の活性化のため街づくりの一環で始まった。コレクションの活性化という側面もあった。地元の人はどういう作品を収蔵しているか知ってもらう意味合いもある。セキュリティとメンテナンスの問題はあるが、設置してから盗難は1件だけだった、富山市の民意の高さがうかがえる。

(竹脇委員) 教育普及事業について、中学生の観覧者数は把握しているか。開館当時、全中学校を招待いただき、事前学習をした上で来館し素晴らしい体験をした記憶がある。現在、体感として中学生の来館は少ないように思うが、小学4年生と中学生の感性は異なると思う。コロナ禍を経て、現在中学校の校外学習が減ってきている背景もあり、中学校長会でも働きかけていきたい。

(土田館長) 高校生以下の観覧料を無料にしているため、中学生のみの人数の把握は難しい。教育普及事業については、コロナ禍よりバスの台数確保が難しくなっている。バスではなく公共交通機関を使用するという小学校も出てきているが、下校時刻や給食の時間などの制限があり、今年度については2校辞退があり残念に思っている。事業は継続していきたいが、今後のやり方や内容については教育委員会と検討している。

(秋元会長) 中学校は部活動ベースになってくるのでは。美術館だけでは難しいと思うので教育委員会や校長会との連携が必要になってくる。

(伊東名誉館長) 美術館は、美術館という場所を離れて活動するのは難しい。当館の教育普及事業はまだまだだと思っている。美術館での教育は学校教育のどの部分

を担うのか、これは行政も含めて議論しなければならない問題なのではないか。

(唐澤委員) 展覧会の関連事業の参加人数についてはどのようなになっているか。

(渡部主任学芸員) 「アナザーワールド：不思議でリアルな世界」では、ワークショップの定員が8名に対し参加人数も同数であった。定員が8名と少ないが、大人の方を対象とした内容の濃い体験であり、8名が最大人数と判断した。

(中島主任学芸員) 「日本近現代ガラスの源流」ではワークショップの定員は8名を2回開催し、参加人数は15名。記念講演会は50席の座席を設け、ほとんど埋まるほどの参加者数であった。また同日にコンサートを開催したが、こちらも同数程度の参加者数であった。

(浅田主任学芸員) 「宮永愛子 詩を包む」では、ワークショップでは20名を定員とし、全て埋まった。トークイベントでは50席設け、おおよそ埋まる人数であった。ギャラリートークは各回10～20名程度の参加者、コンサートは50～100名程度の来場者数であった。

(高橋主任学芸員) 「回顧展：太平洋一 ヴェネツィアン・ガラスの彼方へ」ではトークイベントで40名、コンサートは100名程度、ギャラリートークについてはどの展覧会でも毎回4回程度実施しており、各回10～20名程度参加されており全体では80～100名ほど参加されている。

(唐澤委員) 国立工芸館でも体験型ワークショップを行っているが、スペース上10名程度を定員としているため参考までに伺った。

(浪瀬委員) ガラス大賞展の開会式にてヤマト運輸株式会社の方と話をしたところ、美術品の運搬について学校などで講演を行っているようなので、関連事業の企画案として参考までお伝えしておく。

(外館副会長) ガラスのワークショップは専門技術が必要で大変だと思うが、それにしてもコンスタントに行っているように思った。ギャラリートークについても1つの展覧会で複数回行われていることが素晴らしいと思った。

運搬技術の話については、大学でも実習として行っている。博物館実習について、令和5年度の受け入れは3名と少ないように思うが、これは希望人数であったということか。

(土田館長) 受け入れについては絞っているわけではなく、希望があった人数。コロナ禍から行っていることと、夏休みに帰省する方などが中心になるため、人数的には多くはない。今年度も4名受け入れ予定としている。

(秋元会長) 決算額について、事業費が予算に比べて決算額がかなり下がっている点が気になった。

また、来館者の居住地域について、富山県内からの来場者数が13%ほどだが、地元への貢献と観光地としてのバランスについてどう考えているか。

(開澤次長) 決算額については、入札を行った結果予定価格より下回って落札されたことや、全体として経費削減に努めたことにより予算より下回った。

(土田館長) 来館者の居住地域については、特に令和5年度はコロナがおおよそ明けた

ことや円安により国内外からの観光客が多い年であった。

観光客は企画展ではなく、常設展のみを見られる方が多いが、先日から開催しているガラス大賞展では7月の三連休（7/13～7/15）の来館者数の内訳が常設展より企画展の方が多かった。これは観光客ではなく市民の方が来られているのではないかと推測している。

（嘉 義 委 員）教育普及事業にて小学4年生が毎年来ているが、知識を持った上で鑑賞するとなると6年生が良いようにも思う。どの学年が鑑賞するのに妥当だと考えているか。

（土 田 館 長）現在のプログラムでは作品を見て素直に感動してもらいたいという思いで行っている。6年生を対象とした場合はプログラムの内容を変えていく必要があると思う。

（嘉 義 委 員）6年生は卒業制作としてガラス工房に行き体験を行っている。小学校・中学校・高校のそれぞれの段階でガラスに対する愛着を生み出す筋道が生み出せるとより良くなると思う。

（秋 元 会 長）本来であれば年齢ごとに異なる事業を実施できれば1番良いと思う。ガラス工房にて6年生が体験するということがあるのなら、6年生時に何かプログラムを組むというのも1つかもしいない。

（土 田 館 長）ガラス大賞展の受賞作家をガラス工房にご案内し、教育普及事業と工房での制作体験についての説明をしたところ、行政がサポートしていることについて大変褒めていただいた。

小学4年生と6年生に対する事業は実施されているが、中学生・高校生に対して何を行っていくかという点が課題となっている。

（伊東名誉館長）プロジェクトの持続性はある。一方で、これまでのプロジェクトの分析をする必要がある。子どもは年齢によって知識の吸収の仕方が異なる。5～6年生は、3～4年生と違い、記述したものを理解し、理論的に吸収したい年齢である。こうした違いをふまえてプログラムを組み立てるべきである。

（浪 瀬 委 員）ガラス工房30周年記念展について、以前ガラス工房で制作している映像を美術館とつなぐという話を聞いたが、現状どうなっているか。

ガラス工房にも来たことがない人が多いと思う。市内の人に来てくれるガラス美術館・ガラス工房として、ガラス工房との連携がわかるような企画をしてもらいたい。

2階カフェとショップとの境にあるカーテンの造花に悪い印象を受け気になった。

（伊東名誉館長）映像の中継については諦めているわけではない。カーテンについては隈研吾氏のデザインでコンセプトがあるもの。

（秋 元 会 長）ガラス大賞展をはじめとしたガラスを通じた国際交流について、何か動きはあるか。

（土 田 館 長）地道な活動の例としてはものの貸し借りがあり、当館の作品が海外に借用

された例はないが、今年度開催するエミール・ガレ展ではパリ装飾美術館から作品を借用する。また、コーニングガラス美術館とは協定を結んでおり、2022年に共同展覧会を開催し、2026年にも2回目の共同展覧会を開催する予定。また会長を務めている ICOM GLASS の年会では富山市のガラスの活動について紹介している。

(外 館 委 員) 母親が美術の教員だったこともあり、毎週美術館に行っていたが、小学生の頃に見た作品は未だに覚えている。小学4年生を招待しているということだが、何歳から見ても良いと思っている。

(伊東名誉館長) 富山市では祖父母が孫と一緒に来館すると無料で入館できる「孫とおでかけ事業」を行っている。

(浪 瀬 委 員) 65歳以上が使用できる「おでかけ定期券」があり、公共交通機関が1回100円で利用できるというもの。「孫とおでかけ事業」と併用できるが、意外と知られていないように思う。

(秋 元 会 長) 教育普及事業については現状より膨らませる考えはあるか。

(土 田 館 長) 事業を膨らませるには組織構成から考えていく必要があるが、今年度から触れるガラスのサンプルをつくり、重さや手触りの違いを体験してもらうことを予定している。また、来られない学校に対して出張事業を行う案も出ている。事業の縮小や維持だけではなくできる範囲で要望をくみ取っていきたい。

7. 閉会

(以上)